

【取扱い厳重注意】

平成24年1月30日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成24年1月17日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

民主党衆議院議員 寺田 学 (事故当時は内閣総理大臣補佐官)

2 聴取日時

平成24年1月17日午後3時30分から同日午後5時40分まで

3 聴取場所

大手町合同庁舎919会議室

4 聴取者

柳田邦男委員、高嶋智光参事官、飯崎準参事官補佐、仁保智紀主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

本文において(1)～(6)として言及される避難指示は以下のとおり。

(1) 1Fから半径3km圏内の避難指示(3/11 21:23)

(2) 1Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 5:44)

(3) 2Fから半径3km圏内の避難の指示(3/12 7:45)

(4) 2Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 17:39)

(5) 1Fから半径20km圏内の避難の指示(3/12 18:25)

(6) 1Fから半径20～30km圏内の屋内退避の指示(3/15 11:00)

以上

【取扱い厳重注意】

○質問者 では、最初、全体的な事故対応の流れについて、当時の補佐官、寺田先生が御関与されていた部分についてお話を伺えればと思います。

まず、全体的なざっくりした質問になってしまうのですが、今回事故が起こって、地震・津波、事故とある中で、当時補佐官として全体としてどういう役割を果たされたかというのはどういう御認識でいらっしゃいますでしょうか。

○寺田補佐官 補佐官の一般的なところからですが、補佐官は当時5名、定員全員いたと思いますが、私自身、前々から総理執務室の前にある秘書官室に机を置いて、秘書官室に常駐するような形で補佐官業務をやっていました。ですので、立ち位置としてはかなり秘書官と同様の振る舞い方をするというか、同じような身分とは言いませんけれども、同じような形で仕事をし、総理と秘書官の間をできるだけ円滑にやれるようにというような形で、政務秘書官ではないですが、それに似たような形の仕事をしていました。

震災、地震が起きた瞬間に関して、私は議員会館の自室で参議院の委員会の質疑をチェックして、前の日も徹夜だったものですから、少しうとうとしたときに揺れが来て、それでエレベーターが全部止まったので走って官邸に行ったというところがあります。

こういう形で時系列をだっとなきゃダメでも大丈夫ですか。

○質問者 はい。

○寺田補佐官 その上で官邸に着いたときには、もう総理はたしか地下の方に下りられて、危機管理センターに行かれていましたので、5階にいる秘書官とともに大体の状況を把握していたというのがまず第一歩です。その以後に関しても、秘書官の入りにくい会議体には入っている部分はありましたけれども、補佐官というある種ラインの中に入っていない、総理の下にぼんと付いている役職でしたので、入っている会議、入っていない会議というのが余り規則性というものが無い中で重要な会議にも入っていたり、縷々日々行っている会議に入っていなかったり。特に官僚の皆さんが全員集まるような会議には一切私は出ない形になっておりましたので、そういう形で震災、特に原発対応のときには折に触れて仕事をしていたと思います。

○質問者 わかりました。このまま時系列的にお伺いできればと思うのですが、地震があつて官邸に戻られたとき、総理は地下におられましたか。

○寺田補佐官 恐らくもう執務室にはいらっしゃらなかったと思います。

○質問者 それで、補佐官御自身は5階にいらしたのですか。

○寺田補佐官 何度か下にはおりましたけれども、基本的には5階の秘書官室の方におりました。

○質問者 その後、総理は5階に上がって来られたのですか。

○寺田補佐官 5階に上がって来られたと思います。細かい時系列的なところまで正確に覚えていないのですが、その後、総理の1回目の記者会見がありましたので、記者会見でどのような内容を話すのかということを経験とともに総理と打ち合わせをした記憶があります。

【取扱い厳重注意】

○質問者 わかりました。その当時は地震があつて、まだ事故の発生には至っていないような段階だと思うのですけれども、その当時はどういったことをされたのでしょうか。

○寺田補佐官 震災が起きて第1回目の記者会見でしたので、基本的には地震・津波の情報が多くて、今、振り返ってもあのときの最初の記者会見で原発に関しては安全に停止をしたというようなニュアンスのことを総理は発言されておりました。それまで原発の発想は私の頭の中にはなかったのですが、それが終わられてからだと思えますけれども、ちょっと正確ではないかもしれませんが、寺坂院長と、あと勿論、海江田大臣もいらっしやつて、全電源が落ちているという話があつたと記憶しています。その場には私もいました。

やや印象論になってしまつて申し訳ないのですが、とにかく総理が何度も報告を受けていることに関して、「本当にすべての電源が落ちているのか、予備バッテリーがあるはずだろう」と。私はその知識はなかったのですが、「予備バッテリーも全部水没しました」と。「水没しても何かほかにないのか」「ありません」と。「それは水没したものは水を抜き取つて使えないのか」「恐らく使えないと思えます」と。とにかく電源というものはすべて可能性としてなくなったということを総理が本当に執拗なぐらいしつこく問い合わせているのが非常に印象に残っています。

○質問者 それは、場所はどこになりますか。

○寺田補佐官 執務室だと思います。

○質問者 総理執務室ですか。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 それは寺坂院長に対してですか。

○寺田補佐官 寺坂院長だったのか、寺坂院長以外にもどなたか来られていたのか、ちょっと前後して東電の方がいらっしやつたのかどうかも、その方がどなたであるのかと、寺坂さん自体も私、その瞬間にはわかっていませんでしたから、後々になってあの人が寺坂さんであるといつて、ではそのときのあのお顔と一致するかなというのはちょっとあいまいではあります

ただ、保安院の院長が来られているというような記憶はあるので、海江田大臣と一緒に来られていると。それ以外の方も、恐らく同じジャンパーを着ていらっしやつたような気がするのです。

○質問者 わかりました。その海江田大臣がいらっしやつたときの際の話なのですけれども、菅総理御自身、途中で与野党の党首会談の方に出席をされていると思うのですけれども、その際、どういった経緯で総理が与野党党首会談に出られたかというのは、記憶はございますか。

○寺田補佐官 正直言うと、与野党党首会談に出られているような記憶は、5階にいた人間として余りないぐらい、恐らくかなり短かつたのかなと思えます。なので、当然、総理自身として先ほどの執拗に何度も繰り返し聞いたというのに象徴されるように、私のよう

【取扱い厳重注意】

な素人にとってみると何が起きているのかわからないのですけれども、電源が喪失していることに対する重大さを非常に感じられていましたので、そこら辺は余り何かに断絶したというか、総理がどこかに行かれたというよりは、そこから既に、いわゆる原発対応の緊迫した雰囲気が始まっていたのだなというのが、今思い起こすと感覚としてはあります。

○質問者 わかりました。その後、緊急事態宣言が19時3分に発出をされまして、第1回原災本部会合がその後開かれておるのですけれども、それには御出席はされましたか。

○寺田補佐官 本部会合等、そういうような、言わば閣僚の方々が集まるところにはその後も含めて一切出ておりません。そういう場合にはずっと5階におりました。

○質問者 その間というのは、どういったことをされていたかというのは、記憶はございますか。

○寺田補佐官 その間というのはどの間ですか。

○質問者 総理が第1回原災本部会合に出られて、その当時は別の部屋に行かれていますと思うのですけれども、そのときに補佐官の方は5階で。

○寺田補佐官 秘書官室にはいたと思います。基本的にそこに自分の机がありますので、そこに座っていましたね。私の中の記憶で言うと、もうすぐに電源車の手配まで飛ぶかどうか別ですけれども、とにかく電源の手配は必要だということで、それを秘書官たちと一緒にやっていたから、電源車の手配の仕事をしていたと思いますし、総理自身に対しては前後しているのかもわかりませんが、とにかくこういうことが起きた場合の法的な体系と申しますか、どのような助言組織があって、どのような形で何ができるのか、何をしなければいけないのかということ非常に気にされていた記憶はあります。なので、電源車の前にそういうような話がありましたから、そういうような形で総理が会議に出ている間の正確な記憶ではないですが、次の記憶がある電源車まではそういう形でどういう法律のたてつけがあるのかという話をしていたと思います。

その後、恐らく班目さんが来る形になると思いますけれども、それはたしか総理がこういう場合にはどういう方を呼ぶことになっておるのかという仕組みにのっとってこういう方ですと、保安院長であり安全委員会の委員長という形でお呼びになられている記憶はあります。

○質問者 班目委員長を呼ばれたのは官邸5階に。

○寺田補佐官 私は官邸5階に来られた記憶があります。

○質問者 それで緊急事態宣言が発出されまして、その後、原災本部会合が終わり、その日の夜9時23分ごろに3kmの避難区域の発表というものがなされておるのですけれども、そういったことを決める会議の場に補佐官はいらっしゃった御記憶はございますか。

○寺田補佐官 結論から言うと、私はそのときにはいないと思います。質問事項にありましたので、自分がこの節目節目にどのようなところにいたのかなというのはありますけれども、避難区域等を決めた場所が多分2つあって、前半は地下の危機管理センターだと思います。この場合でいくと、恐らく3kmと10km、朝の5時44分までは断続的な形です

【取扱い厳重注意】

けれども、総理が下に下りられたときにお決めになられたと思います。その後からの7時45分は総理はいらっしゃらないですね。ヘリコプターから下りられたと思うので、10kmの避難指示なんだというのは多分5階で決められたと思うので、そのときには私はおりました。なので、今、御質問があった最初のタイミングに関しては、私から聞くのもあれですけれども、総理は下にいるのではないですか。

○質問者 3kmの方は、今まで関係者の方に話を聞きますと、どうも5階の方で決まったというような話なのです。

○寺田補佐官 話は前後してあれですけれども、私と細野さんが基本的に原発に関して手伝う補佐官というのは雰囲気としてあって、総理が記者会見をやられて班目さんたちともお話をされて、電源車の手配だということを5階ではやっていたのです。ただ、総理にはちゃんと下に下りていただきますように。下には携帯が繋がらないという環境がありますので、黒電話を1本引いて、5階にダイレクトにつながる電話を用意する上で総理には下に下りていただいて、危機管理センターの奥にある中2階みたいな小部屋に入ってもらおう手配はしたのです。

そのときに私と細野さんの2人で下に下りて行って、細野さんと避難区域の策定と電源車の手配という大きな柱があったので、当初、細野さんから寺田君の方に住民の避難の方をやってねみたい、私は電源車をやるわみたい感じで、秘書官とは私の方が付き合いが長いとか仕事を一緒にしていましたので、秘書官が今いろいろやっている電源車の手配は私の方がいいと思いましたので、私は5階に上がりますと言って、細野さんは下に残られたと思うのです。なので、そのときは多分下にいらっしゃったとは思いますが、5階なのかもしれません。そのときにそういうことであれば私は参加していないと思います。

○質問者 今、前半は地下で後半は5階と言われた分かれ目の10kmというのは、確認なのですけれども、(1)のときには寺田先生の御記憶ですと、これは地下の方だったのではないかと。

○寺田補佐官 危機管理センターの小部屋の方でお決めになられたと思うんですけれどもね。

○質問者 (2)は、総理はいらっしゃらない時間ですか。

○寺田補佐官 (2)はおります。(2)は5時44分なので、官邸からヘリコプターが飛ぶ前に危機管理センターに下りていますので、その危機管理センターの小部屋で議論された。これははっきりとした記憶があります。

○質問者 (3)がいらっしゃらないのですか。

○寺田補佐官 7時45分は福島にいます。

○質問者 この次から。

○寺田補佐官 その12日の17時の方は、総理は恐らく下には行かれていないと思うので、多分上の方だと思います。

○質問者 その間は、ちょっと話が戻るのですけれども、5階においては電源車の手配の

【取扱い厳重注意】

話をされていたと。具体的にはどういった方とどういった内容のことですか。

○寺田補佐官 保安院を通じてなのか、保安院を通り越して東電のどれかなのか、はっきりとした記憶はないですけれども、いずれにしてもその両方、どちらかから、とにかく電源車がどこにあるのかというような把握から始まったと思います。基本的なスタンスは、勿論、事業会社の東電及び他の電力会社が一番詳しくて、どこに何があってというのはありますけれども、政府としては高速道路を優先的に通せたり、ヘリコプターで吊って持っていけないとか、サポートとしてできるだけ早く現場に到着させる手段というものを後方支援的にやろうという雰囲気で行っていました。

自衛隊のヘリコプターか、米軍の話まで出ていたか定かではないけれども、いずれにしてもヘリで吊るために電源車の重量やサイズとかをできるだけ早く自衛隊の担当者の具体的な氏名まで出して言ってくれと東電側に投げたけれども、なかなか話が来ないとか、そういうような形でやっていたし、何々インターから電源車が1台乗って何時間かかかってどこに何時間で着くとか、そのときに警察側の秘書官が手配をしてきっちりそこまで着くようにとかというのを直接やっていた分もありますし、窓口的に下でやっているのを上で情報を一元的に管理していたのがありますけれども、そういう進捗管理をしていました。

一定程度の動きがあり次第、先ほど申し上げた黒電話だったかな、電話番号をつかって、総理のいる下の小部屋に直接つながるような形を取っていましたので、そこに動きがあり次第お電話をして情報を上げるということで、電源車の進捗だけは5階で別にある程度ウォッチをしていた、御報告を下にしていたというのが業務内容でしたので。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、この電源車の話が地下の危機管理センターではなくて5階の方で別途検討していたというのは、それは何か5階でやらなければいけない理由があったのでしょうか。

○寺田補佐官 安易な推測では余り言えないのであれですけれども、私も多少その点に関しては、5階の秘書官でやることに対しての違和感がありました。ただ、秘書官たちの動きを見ていると、それは当然危機管理センターの人間であったり、自衛隊であれば自衛隊本省の人間を含めて連絡をしていた部分もありますので、そこら辺はただ単純に人としての秘書官がやっているというよりは、組織としてやっているような雰囲気があったので、そういうような最初の多少の違和感というのは途中からなくなりました。

ただ、危機管理センター自体がそのときに何をやっていたのかというのは、私は知るよしもなかったわけですから、いずれにせよ東電側とつながっている部分でそういうような電源車の手配をするのが先決であり、それに対しての助力が必要となっているという環境でしたので、お手伝いをしているというところが現実的なところでした。

また、実際的には直接的な手配云々というよりは、どのような形になっているのかということを経理の秘書官たちがウォッチをして随時情報を上げて、それ以外の避難区域の策定とかもやられていたのだと思いますけれども、言い方は難しいですけれども、そういう

【取扱い厳重注意】

ことに御専念いただけるように、秘書官たちが大体の進捗状態をウォッチして御報告を上げるといふ形なので、手配という言葉が適切かどうかやや難しいところはありますね。

○質問者 わかりました。

○質問者 本来だったら保安院がそういうことをやるべきで、総理官邸の秘書官なり秘書室なり、そこがやる話ではないのではないかと思うのですけれども。

○寺田補佐官 私も先ほど申し上げたとおり、当初そういうような違和感がありましたけれども、最後に申し上げたとおり、やや状態がどうなっているのかというのをウォッチするというような形でしたので、直接的に何か秘書官がブリッジをかけるような形でやったのは自衛隊との連絡ぐらいかなと。多分そこは保安院としての所掌を超えているのか、下の危機管理センターとしてもなかなかレスポンスが難しいのかわかりませんが、どちらかというに進捗状況をチェックしお伝えをするという役割に近かったです。

○質問者 その当時、電源車の情報というのは直接地下にオペレーションルームなどを通じて総理に上がるというルートではなかったのでしょうか。

○寺田補佐官 そういうルートも同時に確保されていたかもしれませんが、その確認は、私はしていません。

○質問者 相互の、保安院に設置された ERC だとか、管理センターだとか、あるいは5階の、お互いにどういう連絡を取っていたのか、あるいはそこと連絡を取っていたのかどうか。それとも各秘書官の自分の出身庁と連絡を取っていたのかということについては、寺田先生の方では把握されていないということですか。

○寺田補佐官 そうですね。一義的に保安院から上がってくるのか、東電から上がってくるのか、秘書官たちが情報、別に全員が自分の省庁から情報を得ているわけではないでしょうけれども、上がってきた情報に関してホワイトボードとかに何時着とかそういうような形で情報を整理、ウォッチしていたというのに近いですね。なので、そこはほかの方にもお聞きになられるのかもしれませんが、警察の秘書官の梶田自体が下の危機管理センターから聞いているのか、貞森が保安院から聞いているのかというような形か、私は出どころに関してはそこまではっきり把握していませんでしたから。

○質問者 この当時の状況をこれまでいろんな方にお話を伺ったのですけれども、総理が5階にいらっしゃることもたびたびあったようなのですけれども、寺田先生の印象として、総理は基本的に地下にいらっしゃるということですか。

○寺田補佐官 いつまでの話ですか。

○質問者 視察に行かれるぐらいです。

○寺田補佐官 そこまでの長いスパンで言うところとちょっと一区切りで言えないのですけれども、オバマ大統領と電話会談をたしか未明ぐらいにされているのですね。政府のあれを見ると多分わかると思いますが、それまでの間は下にいらっしゃったと思います。

恐らくオバマ大統領との電話会談は下ではできませんので、5階の執務室でするために準備段階から上がられてきていると思います。それから私と秘書官と一緒に朝5時前、

【取扱い厳重注意】

4時半ぐらいに危機管理センターに下りるまでは、5階の執務室内ないしは執務室の奥の方に総理はいらっしゃった。

○質問者 わかりました。その電話会談が終わられて5階にいらっしゃる間というのは、総理はどういったことをされていたのですか。

○寺田補佐官 そこからは時系列的に言うとベントの相談とか何かが多分来ているとは思いますが、私はそのベントを了解する、しないの打ち合わせに入っていないので。ただし総理が秘書官に1時か2時ぐらいの段階で、明日朝一番で被災地を、福島を当然含めた上で、現地へ赴くことを用意しろというの難しいですけども、そういうことを準備、最終的に行くことと決めたわけではないのですが、そういうようなことを判断した場合にできるようにしておけというような用意の指示が出ましたので、そこはもう警察の人間、経産の人間含め、秘書官たちと大体の大きなプランと乗務員含めての調整に私は入っていたので、そのとき総理は恐らくベントの話をしているかもしれませんが。なので、そこは私は4時半と一緒に下りるまで総理とお会いしていません。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、今の話は12日の午前1時か2時ごろでしたか。

○寺田補佐官 はい。それぐらいです。

○質問者 その朝一で第一原発に行くことになった場合、行けるように準備しておけという趣旨の御指示。これは直接寺田先生がお聞きになったのですか。

○寺田補佐官 私ではないです。多分政務秘書官の岡本に多分一言総理が御指示されたと思います。その岡本から私を含めて秘書官たちが集まってこういうようなお話があったので行くことと判断するとしたらどういうプランがあるのか、どういう経路があるのかということも検討に入った記憶をしています。

○質問者 その話を寺田先生がお聞きになったのは、5階にいらっしゃる時ということですね。

○寺田補佐官 勿論そうです。

○質問者 岡本秘書官からお聞きになったということですか。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 総理はそのときには地下の方の中2階の部屋にいらっしゃったのですか。

○寺田補佐官 もう時間的に言うと、そこら辺の1時か2時かというのは微妙なですけども、オバマ大統領が多分12時とかそんなではないですか。明けるか明けないかのころかそこら辺なので、その後に多分岡本は5階で言われていると思うので、5階で総理から指示を受けて、5階にいた私も含めて秘書官たちで設計図をつくったというところだと思います。

○質問者 視察についてなのですけども、これは総理御自身の御発意だったのですか。

○寺田補佐官 発意という言葉に返すとしたら発意だと思います。

○質問者 どういった趣旨で視察をする必要があったか、そういったことというのは秘書

【取扱い厳重注意】

官からは。

○寺田補佐官 直接、一番最初の瞬間に私は立ち会っていないのであれですが、後々いろいろ話す意味においても、被災地の現場、津波の現場も含めてしっかり見たい。ただ、下に下りるということになるというんな方の労力を割くので上から見るしかないかというのは当初からあったと思います。

福島に関しては、11日の夜の段階で既に東京電力及び保安院からの情報が余りにも断片的であり、予測性の伴わない事務的な話であったり、電源車の手配もそうでしたけれども、そういうことだったので、現場の方としっかりちゃんと話さなければいけないという問題意識は総理の中にはあったと思います。

○質問者 何か具体的な出来事があって、これは現場に行かないといけないというよりは。

○寺田補佐官 発意の段階ではそのような具体的な事実はないと思います。

○質問者 わかりました。その当時、現地に行くということを聞かれて、どういった御印象をお持ちになりましたか。

○寺田補佐官 言い方はちょっとポップで申し訳ない。なかなかアクティブな総理でしたので、総理らしい発意だなと思いつつも、ただ、本当に未曾有の災害が起きていますので、それ自体がどのように現場に影響を与えるのかということも考えましたし、正直申し上げて私は福島に行くことに対しては、恐怖感がなかったと言えようそになると思います。

ただ、総理自身としてさまざま考えられた上でのお考えだったのですから、そこはまず作業としては進めよう。総理が官邸を離れられるので、それは長官を含めて主要な人間、立場の方への御案内と一定の御了解をいただかないというところは思っていたと思いますし、そういうような形で枝野長官、福山副長官含めてお話をした記憶はあります。

○質問者 その準備を進めるに当たって、先ほどおっしゃったように総理自身に危険が及ぶ可能性もあったりするわけですし、その準備段階で検討された事項というのはどういったことなのですか。

○寺田補佐官 身の危険とかの上での準備ということですか。

○質問者 及び指揮官がその場所を離れるとか、さまざまなその後のこと。

○寺田補佐官 正直なところ、その場で、自分自身怖かった部分はありましたけれども、命まで落とすというところまでは、私の原子力に関する知識が少ないせいかもしれませんし、当時まだ11日明けて12日ぐらいのときには、すごいことが起きているといえども、具体的な事象というか当然その後における爆発も起きていませんから、そこまで身の危険は感じませんでした。むしろスーパーピューマという陸自のヘリコプターに乗っていくのですけれども、それ自体と連絡はつくのかどうかとか、随時官邸との連絡をつけられるかどうかというところ、そういうようなところに気は使いました。スーパーピューマ自体は連絡をつけられるという報告を受けましたし、F1自体が電話がなかなか通じないところだということで、いわゆる衛星携帯を用意して持っていくとか、そういうような準備をしていましたし、あとスーパーピューマ自体、定員が非常に少ないので、総理が行かれる場合に

【取扱い厳重注意】

において必ず必然的に乗る警護官、秘書官、医務官を除いた人間でだれが行くのかというところの調整も気を使いましたし、貞森秘書官とはマスコミは基本的には総理が行く場合は同行があるのですけれども、制限の問題と行く場所の問題もありますので、そこら辺を記者クラブと調整したりというものに時間を割いていました。

○質問者 当時、実際、現地の方には寺田先生と、あと班目先生も行かれた。

○寺田補佐官 委員長は行かれました。

○質問者 どういった方を人選されたというのは。

○寺田補佐官 班目委員長に関しては、恐らく総理としても何かあった場合に助言を受けてその場で決めなければいけないことがあるということをお想像されたのかもしれませんが、そういうことで一番政府に対する諮問する立場の人間を連れていくという、責任者を連れていきたいというお気持ちがあったのだと思います。早い段階から班目さんが行かれることに関してはセットされていたような気がします。

○質問者 総理の御意向としてということでしょうか。

○寺田補佐官 総理の御意向なのか、その後、さまざまな方に総理が数時間離られるという場合における御助言があったのかもしれませんが、最終的に本当にバッチが付いている人間はだれが行くのかというところであったり、マスコミはだれが行くのかということがずっとブランクになり続けましたけれども、それ以外の方はほぼ必然的に早い段階で決まっていたような印象がありますね。

○質問者 最終的に寺田先生が御同行されたわけですが、そうなった経緯というのはどういったことですか。

○寺田補佐官 立場的に言うと福山副長官か私であろうと。長官は当然離れられませんし、藤井副長官に行っていただくわけにもいきませんし、それ以外の人間といっても政務三役になりますから、福山さんか私かという話のときに、東北の人間だということ、私も秋田ということで私が乗りますというお話を。

○質問者 寺田先生の方から。

○寺田補佐官 福山さんは勿論、ラインの中に入ってお仕事をされていますので、こういう場合には私の方がいいだろうと自分で判断しました。

○質問者 わかりました。

○質問者 ちょっとその点に関してなのですが、寺田先生と細野先生との役割分担というので、細野大臣が原発、寺田先生が津波の方という大きな役割分担はどこかの段階でされたことはありましたか。

○寺田補佐官 私が津波というのはなかったです。

○質問者 地震そのものといえますか。

○寺田補佐官 原発と何とかというよりは、むしろその後も含めて 17 日ぐらいまでそうですが、両方とも原発に関わっていて、やはり私自身、冒頭申し上げたとおり、秘書官的な立ち回りがずっと今までの慣例でありましたので、結局、総理自身が原発に対応

【取扱い厳重注意】

している以上そちら側に入ると。ラインの人間でない以上、総理側に付いてやるということなので。

先ほど申し上げたとおり、何時くらいか、11日の夜に下に下りて、電源車と住民の避難という話に関しては細野さんが住民の避難の方をやりましよう。私は秘書官たちが今ある程度情報をウォッチしている電源車の方にいきますという役割分担を細野さんとはしました。

○質問者 わかりました。失礼しました。では、済みませんでした。

○質問者 そうしますと、原発対応以外の部分で寺田補佐官が当時対応されていたということですか。

○寺田補佐官 私は津波に関しては。

○質問者 津波とか地震とかですね。東北全般。

○寺田補佐官 地震に関しては一切関連していません。勿論、その後を含めて大きな余震等ありまして、秘書官自体が動く場合及び総理に関して地震・津波に関して何かある場合には私も同席したりということはありませんでしたが、そもそも補佐官自体は下に別に事務局は何も持たない人間ですので、私は基本的に総理に近い立場にいるというか、物理的にも近い立場にいるというところにとどまります。

○質問者 わかりました。視察の話に戻るのですけれども、先ほどの話では総理からは準備をしておくようにという指示があって準備を進められたのですが、最終的に行くことになったのはいつごろでどういった経緯でというのは。

○寺田補佐官 時間的にはもう6時。出発の一応準備した段階での時間が6時で、余りそう簡単にずらしたりできるような話ではなかったのです。勿論それは現場のこともありますし、スーパーピューマ自体が官邸の上でホバリングをし続けている時間がどうこうとか、そういうような制限もあって、ある程度の仮どめをして組み立てていました。

4時から5時に変わるころに総理と一緒に下に下りて、そのときにたしか福山さんだと思うのですけれども、福山さんと総理と私と岡本秘書官、あとほかの秘書官もいますけれども、一緒に下の危機管理センターまで下りていくときに、歩きながら福山さんからベントができていないという報告と周辺の線量が高くなってきているという2つの報告を受けているのを私も印象的に聞いた記憶があります。

物事がもう快方には全く向かっていないのだなという印象を持ちながら、総理とともに危機管理センターの奥の中2階のお部屋のところまで行って、私自身と一緒に視察に行くことになっていますので、視察関係の最終的な詰めを部屋の外に出てやったり、時々中には入りましたけれども、基本的には部屋の外に秘書官たちがずっと連なっていますから、そこら辺と色々な打ち合わせをしていました。

最終的に6時にして、報道にもそういうふうに、当然総理動静ですのでお伝えしなければいけないので、マスコミたちも6時には官邸を出るのだという話があったので、恐らくその間に避難区域の拡大であったり今後どうなるのかという見通しを長官や海江田大

【取扱い厳重注意】

臣や細野さんも入られていたと思いますし、福山さんも当然入って、安全委員会、あと保安院も入られてお話をされている中に、時間が来ましたのでカットインして入って、視察の時間が来ておりますがというお話をしました。

総理からはどう思うかというお話があったので、私の担当している部分というか、マスコミとの関係とも含めたところで助言する部分がありましたので、6時にお出になられるというお話をして準備をして急遽取りやめるということになればそれはそれで1つのいろいろな意味でのメッセージ性にはなりますと。そこを含めた上で御判断くださいというお話をして、総理がでは行くというお話になったので、その後6時15分ぐらいに官邸を出るということになりました。多分6時前後に総理としては最終的に行くという決断を下したと思います。

○質問者 そうしますと、避難について協議をされている場所に割って入って、そこに総理が既にいらっしゃった。

○寺田補佐官 勿論いらっしゃいました。危機管理センターの奥の小部屋です。

○質問者 そこに補佐官であり、秘書官が入っていった。

○寺田補佐官 私だけが入りました。

○質問者 わかりました。実際行かれて、1Fに限って言えば吉田所長と会われてお話をされているのですけれども、現場でどういうことをしなければならないとか、総理がしたいとか、そういう総理の御意向というのはあったのでしょうか。

○寺田補佐官 ちょっと時系列的にお話をすると、グラウンドに降りて、もう防護服を着た方が2名いらっしゃって、それ以外に防護服を着ていないのは吉田所長と副社長だと思います。いらっしゃって、マイクロが用意されていまして、マイクロに乗りました。マイクロの右側の前方に総理と武藤副社長、恐らく吉田所長と班目委員長、池田元久さんもいらっしゃったと思うのです。秘書官と私も乗っていったのですが、そのときから武藤副社長には総理はかなり強い口調で何でベントはまだできていないのだということをお話されていたと思います。ただ、武藤副社長の声自体が特別大きいものではなかったもので、それにどうお答えされたかわかりませんでした。

重要免震棟に着いたのですが、私の印象としては、およそ一国の総理が扱われるような扱い方ではまずなかったです。その当時、二重扉だったのですが、まず「早く入れ」と大声でどなられながら全員がまず一重の中に入って、二重が開く前に一重が閉まって、二重扉が開いて、だれかが誘導するような雰囲気があったのだと思いますけれども、奥の方に歩いて行って、線量計を当てられるところに並んだんです。勝手にわかりませんから、総理も線量計で体を測られていて、恐らく最初はそういうものだと思ったのですが、なぜ私はこれをされているのだという話になって、とにかく早く打ち合わせをしようということで打ち切られて上に上がっていきます。私も別のレーンに並んで測られていたのですけれども、そのまま上に上がっていくのですが、だれかが1人ぐらいは、恐らく迎えに来られただれか事務的な方が先導していると思うのですが、もう階段の両脇とかも作業員とかが

【取扱い厳重注意】

ぞろぞろ立っていて、印象論で言うとかなりうつろな目をしながらやっているのもうほとんど作業の真ただ中に飛び込んでいったような感じでした。

部屋に着いたのですが、ちょうどこれぐらいの部屋でしたけれども、どなたもいらっしやなくてこれはどうなっているのだという話になった後にまた改めて武藤さんと吉田所長が来られて、こういうような長テーブルに座ってお話を始めた。

やはり総理から聞かれたのは今後どうなるのだという見通しと、ベントは何でできないのだという話をされていました。最初に多分武藤副社長がお話をされていたのですが、私が聞く限りにおいても、あいまいな要領を得ないような形でもありましたし、これは吉田さんが言われたのか、武藤さんが言われたのかわかりませんが、私のはっきりと記憶しているのは、ベントがなぜできないのか、これからどれぐらい後にベントができるのだという話のときに、電動のベントの準備をしていますと。手でベントをするかどうかを1時間後に決めますと。「電動ベントはどれぐらいになったらできるのか」と言ったら「4時間後です」と言われて、物すごくゆっくりしているなというのを私は印象として記憶しています。

総理の方からとにかく早くやれという話をされて、言葉そのものの記憶はないですが、吉田さんが前向きな話をされた記憶があります。私の個人的な素人的な感じで見ても、非常に吉田さんの方がポジティブに何か解決しようという意識を持って、かつ体系的に物事をとらえている感じがありましたけれども、武藤さんはどちらかというとなぜできないことを列挙しているような雰囲気があったので、非常に武藤副社長に総理は厳しかったですし、吉田さんに対してはかなり総理からも建設的な話をしようという雰囲気を感じられましたが、重要免震棟に入るときの雰囲気を含めて物すごく殺気立っている雰囲気だったので、一層総理自身として口調がきつかったという印象があります。それは30分か40分くらいありました。

○質問者 わかりました。当時、視察を終えられた総理が何か感想としてよかったとかそういうことをおっしゃっていた記憶というのはございますか。

○寺田補佐官 吉田所長とお話しされたことに関してはよかったと。恐らく前日から東電の本社側と話しているけれども、わからないであったり把握できていないとかという話が多かったですし、11、12、13、14 ぐらいまで一番本当の物事が動いていたときに総理が一貫して言っていたのは、「とにかく物事をパラレルで考えろ」という言葉で言っていたので、リスク案件は全部出して、1号機から何号機まで、2Fもあるという全部のことを書き出して、それがどのように進捗しているのかということをやっとチェックしてパラレルで全部対策を打ってくれということをやっていたのですが、東電側がそういうような雰囲気ではなかったもので、それがかなりブラストレーションにはなっていたと思います。

それが吉田所長と会われて、吉田所長自体が非常にそういう意味でのパラレルで物事を考えてやっている雰囲気を感じ取られたようで、その点が会ってよかったし、現場監督と

【取扱い嚴重注意】

しては彼なら任せられるという印象を持たれたのは近くにいて思いました。

○質問者 わかりました。視察が終わって、その後、官邸の方にまた戻って来られるのですけれども、戻って来られてからの動きというのでしょうか、総理はそのまま原発対応に当たるような形だったのでしょうか。

○寺田補佐官 原発対応に当たるといっても、ベントをするのを待つという言い方もあれですけれども、あと現場の作業をしてもらうということですし、その後自体は総理自身として返ってきてすぐまた執務室に何かというよりは、ちょっと一度奥の方に入られて休憩をされていたか、何かをお考えか、いずれにせよ執務室でだれかとお会いしていたというような記憶は、とりあえず 12 日の帰ってきてからの午前中ぐらいまではないです。

○質問者 戻ってこられて補佐官御自身はどういったことをされていたのでしょうか。

○寺田補佐官 私は一度、走れば 5 分で宿舎に着きますので、宿舎に帰ってシャワーを浴びて、着替えてまたすぐに官邸に戻って、いない間の話とかを秘書官から聞いたりしていました。一夜明けて報道も含めて全体の状況もお話をしていますので、政府として把握している状況と報道として把握している状況をいろいろ見ていたというのがそのころの午前中の記憶です。

○質問者 わかりました。その後、少し時間は飛ぶのですけれども、同じ 12 日の午後 3 時過ぎに 1 号機が爆発をするのですけれども、そのとき補佐官は官邸にいらっしゃったのですか。

○寺田補佐官 5 階にいました。そこから後はもうほぼ 5 階に。

○質問者 爆発したということはどういう形でどのタイミングでお知りになられたのですか。

○寺田補佐官 結論から言うとテレビです。警察の秘書官が基本的に危機管理センターからの直近の情報を上げる役割になっていました。秘書官と秘書官付室の人間です。あの当時、何か白いのが出ているという噂があるとか、そういうような情報は多分危機管理センターも把握していたように思います。ただ、それが何なのかというのはわからないから確認中とかというレベルで官邸の情報というのはその程度だったと思います。

テレビで爆発の映像があったのでそれをお伝えした。ただ、テレビの全国放送で流された瞬間、事態は爆発からもかなり経っていますので、その間は今思うと情報というのはしっかりと把握できていなかったと思います。

○質問者 テレビは秘書官室でごらんになられたのですか。

○寺田補佐官 私自身はまず秘書官室と連動するような形で付室というのがあるのですけれども、その付室と秘書官室でチャンネルを分け合って全チャンネルを見ている感じでしたので、最初は付の人間が日テレを見てくださいということで秘書官室に走ってきて、秘書官室で日テレをチェックした場合に爆発の映像だったので、執務室に入っていったと思います。

○質問者 補佐官御自身が執務室に。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 私が入って行ったと思います。

○質問者 そのとき総理もまたテレビを見られたのですか。

○寺田補佐官 総理自身はその映像ではないのをお付けになられていたかもしれませんが、どなたかと打ち合わせはしていました。どなたかというのは、恐らく福山さんとかそういうレベルの非常に近い人間と何か打ち合わせをされていたように思いますけれども、チャンネルを変えて、班目さんもその瞬間にいらっしゃったか、直ちに班目さんが呼ばれたかどうかですけれども、執務室で総理にはテレビをごらんになっていただきました。

○質問者 そこで総理の反応というのでしょうか、どういった。

○寺田補佐官 ぱっと見は落ち着いていました。別に内実も落ち着いていないわけではないですけれども、前の日、班目さんとかといろいろお話をしているときに、設計図、簡単なプラントの図を出して班目さんがいろいろ説明、保安院が説明しているときに、爆発の話はしていたのです。私の記憶だと、総理の方から爆発の危険性はないのかという話をしていました。そこは総理自身として特別水素爆発にこだわったわけではなくて、まずとにかく爆発の可能性はないかという話をして、班目さんが「ありません」と言って、総理の方から水素の話を出したと思うのです。水素爆発がないのかというときに、班目さんが「ありません」と。窒素充填の話までされていたかどうかわかりませんが、「ありません」という話をされて、総理はしつこく「ないのか」と、「存在していないのか」と2回ぐらい問いただしたら、班目さんが「どこか違うところにある」みたいなことを言い出して、「あるのではないか」みたいな話にはなっていたのです。だったら爆発の危険性はあるだろうみたいな話を11日に言っていたので、現実的に12日に爆発したときに、私は前々から。

○質問者 12日ですか。

○寺田補佐官 12日に。

○質問者 そうすると、今の話は11日ですか。

○寺田補佐官 11日の日に話している。いずれにせよ爆発の前に班目さんはないと言っていたのが起きたので、私としては、総理はどんと怒るだろうなという印象だったのが全く怒らなかったで、それが意外だなというのが印象には残っているのです。なので、落ち着いていました。これはどういうことなのか直ちに調べてくれと。何が必要なのかと。それは多分避難のことも含めて、何が起きているかわからない限りどうしたらいいのかわからないので、情報収集と考え得る今の段階での政府がしなければいけないことというのがどういうものがあるか考えてくれというのを長官ないしは班目さんの方にも話をされていたと思います。

さっき、飛び飛び話しているけれども、補足をすると、爆発の瞬間自体に班目さんがいたかどうか、長官がいたのかわかりませんが、かなり早い段階に爆発を見た瞬間に関係者を全部呼んでくれと言われたので、補充する形で関係者を全部呼んだ。その関係者というのは、長官、副長官。副長官というのは基本的に福山さんですけれども、班目さん、保安院だと思います。それはある種そういう何か起きたときのレギュラー。避難区域の策

【取扱い厳重注意】

定はそこに必ず危機管理監が入りますけれども、そういう形で呼んで先ほどのような話をした。

○質問者 細野補佐官であつたり。

○寺田補佐官 細野さんもいらっしゃいましたし、海江田さんもいらっしゃると思います。

○質問者 わかりました。その後、また少し時間が経って、夕方ぐらいからちよつとメディアにも出てきました海水注入の話というのが出てくるのですけれども、そういう議論の場に立ち会われたのか記憶はございますか。

○寺田補佐官 海水注入は、私は全く立ち入っていません。私は海水注入の話はかなり時間が経った後に、新聞記事や報道を通して話題になったときに非常に違和感を持ちました。やや横道にそれた話になっていくのですが、私が海水注入で違和感を持ったというのは、恐らく12日か11日なのかわかりませんが、東電の方と総理がお話をしているときに私も同席をしていて、東電側に政府に対して必要な物資及び行動、何が必要なのかということをちゃんと指示してくれと。それが何か簡単に紙にまとめるでもいいから出してくればその可否を直ちに判断するという話をして、東電が最初、では1日待ってくれとかと言っていたのですけれども、そんなのでは遅いからと言ってかなり早く出してもらったときにも私は同席したのですけれども、そのリスト自体は専門的な用語が並んでいたのによくわかっていないのですけれども、非常にクオリティの高い水の話があったのです。多分それは炉を冷やすのに一番適している水だという話で、ちょうど一緒にいた秘書官とかも薬とかに詳しい人間がいて、医療品とかでも使うようなクオリティの高い水だったらいいのですけれども、それを東電が言ってきたときに総理自身がこれは何だと、いわゆる冷やす水ですと。わかるけれども、この緊急事態のときに、つまるところ冷やせばいいのだろうと。それは真水だろうが海水だろうがとにかく今冷やさなければいけないのだから冷やせばいいのだろうと。なんで危機的な環境とかそういうことを加味せずに一般論的なものを出してくるのだということに対する、かなり強く不満を示されたのです。

なので、総理自身の頭の中に海水注入を躊躇するような、一般論としては別ですけれども、あの環境において否定されるような素地はないなとずっと思っていたので、後の新聞報道やテレビで海水を総理が止めたと聞いたときには非常に強い違和感を持ったというのはあります。海水に関しては、私はもうそれぐらいしか総理が何を考えているのかというのはわかりません。

○質問者 そのとき東電の方は、クオリティの高い水というのは真水とかですか。

○寺田補佐官 真水よりいい水らしいんです。わからないですけれども。

○質問者 それに対して東電の方は何か答えられていたのですか。こんな時期にこんなことを言っているかという話をされたときに。

○寺田補佐官 それは「はあ」みたいな感じでした。

○質問者 特に説明、こういう理由でこういうのが必要なのですという説明はされていたのですか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 多少されたかもしれませんが、技術的な話というか、専門的な話はされたかもしれませんが、今、総理が思われているのは、とにかく一刻も早く冷やし続けることが必要だというときに、大量に必要なということにはわかっていましたので、それは現実的なものではないだろうという話をされていたと思います。

○質問者 わかりました。

○質問者 純水をつくっている栗田工業とか幾つかメーカーがありますね。そういう純度の高い水を、そんなものを調達していたらとても間に合わないし。

○寺田補佐官 間に合わないという話だったのだと思います。非常に不満を示されていました。

○質問者 逆に言うと、そのときの話が翌日といいますか、12日の海水注入のときの海水注入で本当に大丈夫なのかというような話につながっていくのでしょうか。

○寺田補佐官 つながっているかどうか、私は両方の会議に出ていませんので感触も含めてないのですが、つながるとしたら総理が躊躇しているというような伝わり方はしないと思うのです。私が持った印象と同じですけれども。なので、私はかなり海水注入の話自体が非常に報道の背景を丹念に調べると、政治的な自民党の某代議士が絡まれているとか、その方から直接電話が来てこれを書けとかと言われてたとかという記者たちがいっぱいいましたので、そういうようなたぐいだというのは非常に強く思ったのです。

もともと電話をかけるようなことをしない代議士がかけてだれだれに聞けど、それが全部知っているからみたいな話でその話をあえて伝搬させようとしていたのがあって、私の方に問い合わせがいっぱい来ましたので、ややかなり政治的にこの話題というのは使われているのだなという思いもあったので、正直その後には再臨界の話が実はその場であったかどうかと聞いて、多少私もそういうこともあったのだと思いましたがけれども、私は違和感が強いことがありました。基本的にはその会議にタッチしていないのでわからないということです。

○質問者 わかりました。当時、その会議のみならず政府全体として原子炉に注水をしないといけないというような議論があったと思うのですけれども、そういった一般的な話として補佐官はそういった御認識はございましたか。

○寺田補佐官 そういったというのは。

○質問者 注水が必要である、早くやらなければならないということですか。

○寺田補佐官 それは総理自身が一番そういうような思いが強かったので、注水を必ずととにかく水を入れて冷やし続けること以外にないということに対する意識は、当初、私は仕組みはわからなかったですけれども、総理が非常に強く言われているので、そこはどの、1号、2号とかにかかわらず、すべての危険要因に対してそんなような措置がとれるように用意しておけという話がありました。

○質問者 当時、ちょっと細かい話になるのですけれども、その議論が行われるのが執務室で開始されるのが夕方6時くらいからなのですか。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 その執務室でというのは海水。

○質問者 海水注入について。その前の段階で海江田大臣が保安院の権限を持って東電に対して海水を注入するよという指示をされていたそうなのですが、そういった話というのは。

○寺田補佐官 私は記憶はないですね。もしそういう話のときに立ち会っているのかもしれませんが、特別印象に残るような流れではなかったので記憶していないのかもしれませんが。

○質問者 わかりました。その海水注入に関する官邸5階執務室での議論が夕方6時ぐらいから8時ぐらいまで続くのですけれども、その間というのはどういったことをされていきましたか。

○寺田補佐官 私は何をやっていたのかはわかりません。後ほどお話をされるのかわかりませんが、執務室の隣の応接室が原子力対応のある種臨時の本部みたいになり始めるのが12か13ぐらいだと思います。総理の御指示によってとにかくホワイトボードにすべてのリスク案件を書く。そのリスク案件がどう進んでいるかということをチェックしてくれという話があって、なかなか進まなかったのです。とにかく東電の方々が1号機が危なくなると1号機のことだけ書いているのに、まだないのか、まだないのか、あれもあるだろうと言って、4号のプールの存在が発覚したりとか、さまざまそういう形でどんどん2Fまで議論が上がっていくのですけれども、そういうのが同時にその瞬間からあったとしたらそちら側にいたかもしれないですし、秘書官室にいたかもしれないですね。

○質問者 そうしますと、応接室での議論にも補佐官御自身が出席されると。

○寺田補佐官 応接室で行われていることに関しては、15日の統合本部ができるまではほとんどいると思います。

○質問者 いらっしやった。

○寺田補佐官 はい。

○質問者 そこにはどういった方が、海江田大臣とか。

○寺田補佐官 枝野長官、福山、海江田、細野、寺田ぐらいまでがバッチ組として常駐するような人間でした。あとは安全委員会、班目さんのときもあれば委員長代理の方も。

○質問者 久木田先生。

○寺田補佐官 久木田さん。うちは通称博士と呼んでいますが、博士がいるのと、保安院が13日ぐらいからはもう安井さんが完全確定していましたので安井さんがいらっしやった。あとはもうそれぞれ安全委員会、保安院の事務、その下のサポートの人間や何やらが入って、時には政務だけであったり、時には安全委員会、保安院も交えてということでした。東電の人間も勿論いました。

○質問者 聞いた話では、この応接室において13日ぐらいから2時間ごととか3時間ごとに1回ぐらい会議をして、宿題を持ち帰るような形で事務方がまた下りて、また再度会議が開かれる、そういう感じで。

【取扱い厳重注意】

○寺田補佐官 宿題を持って帰るとというのが今例示されるのがメインになるような感じではないですね。どのように動いているのかということをお電ないしは保安院から聞いて、それを安全委員会の人間や政務の人間が情報共有をするということに近かったです。先ほどの2時間とか3時間というのは、炉の状態のパラメータ自体をちゃんと定期的にチェックしようというので定期的にやっていたと思います。

○質問者 そういう定期的なものにも基本的には補佐官がいらっしゃったと。

○寺田補佐官 私はおりました。

○質問者 わかりました。ちょっと話が戻ってしまって恐縮なのですが、海水注入に関する議論が12日夕方に行われているぐらいのタイミングで避難の話も出てくるのですけれども。

○質問者 (4)ですね。

○質問者 この辺りの御議論については、御記憶はございますか。

○寺田補佐官 その後も1回、2回とありますから記憶が混同しているかもしれないのであれですけれども、私が思っている印象は、避難区域を決める、拡大するとか云々のときには、かなりデリケートな問題として人間の管理、その会議体の管理というのをしていた印象があります。

必ず伊藤危機管理監は入れないと避難区域の話はできないみたいな雰囲気があったので、必ず伊藤危機管理監と、あと西川官房副長官補も多分そういうペアだったと思います。それと総理が非常に安全委員会からたてつけとして、そういう場合は安全委員会に聞いてその返答を待って政府で決断するという仕組みを尊重されていたので、安全委員会で班目さんが主ですけれども、そういう方々からの助言を受けて動くというのになっていたと思います。基本的には福山さんと枝野さんが一時的な調整やら何やらをした上で総理が御判断。総理の前で御説明して御判断いただくというようなたてつけになっていたというのは5階で避難区域を決めるときの決まりごとではないのですけれども、1つの慣習といいたいしょうが、そこには私も参加しました。

○質問者 これは3月12日になってからですね。前日の3月11日のときとかには補佐官も参加されていないのですか。

○寺田補佐官 日付で分けるというよりも、5階で決めるときには私も同席していましたので、5階に決めているときには私もその場にいた。その場にはそういうような形。

○質問者 3月11日の最初の3kmのときも検討は5階でやっていたというような話があって、細野補佐官ですとか枝野さん、福山さんという中で、細野補佐官のヒアリングのときに、寺田補佐官もいたかもしれないというような話があったのですけれども、明確に覚えてはいらっしゃらないですか。

○寺田補佐官 これはいいですね。絶対ないという確証も私はないです。この当時、本当に5階と地下に下りる、下りないのどちらかあいまいな辺りなので、5階にいたか確証は持てないですね。